

## 星空観光に資する六呂師高原の空間形成の検討\* (“ふくい PHOENIX プロジェクト” 観光文化研究軸活動報告)

清水 俊貴<sup>\*1</sup>, 下川 勇<sup>\*2</sup>, 藤田 大輔<sup>\*3</sup>, 五十嵐 啓<sup>\*4</sup>

### Examination of Space Formation of Rokuroshi Plateau for Starry Sky Tourism (Activity Report of Tourism-Culture Research axis in "Fukui PHOENIX Project")

Toshitaka SHIMIZU<sup>\*1</sup>, Isamu SHIMOKAWA, Daisuke FUJITA, Hiroshi IGARASHI

<sup>\*1</sup> Faculty of Engineering, Department of Architecture and Civil Engineering

This report discusses the nature of the space in Rokuroshi plateau, which is necessary for practicing the formation of space in Rokuroshi plateau. Rokuroshi Plateau is a space that holds the natural environment as a plateau. In order to use this space, it is necessary to create a way of facing nature. In addition, because this space is confronted with the rage of nature, it is necessary to take steps to protect it from the rage. In this report, the grounds for using hammocks as a method of using the space of Rokuroshi Plateau are summarized.

**Key Words** : Rokuroshi Plateau, Spatiality, Space being Experienced, Protection, Hammock

#### 1. はじめに

本報告は、文部科学省私立大学研究ブランディング事業、『宇宙』事業推進のために地域と協働する“ふくい PHOENIX プロジェクト”観光文化研究軸の取組みのひとつである、大野市六呂師高原の星空観光化に向けた取組みのうち、2018年度から2019年度に実施した「ミルク工房周辺芝生広場の空間活用」を総括するものである。

本研究は、当初計画により、①高原の景観特性を活かすこと、②星空観望のイメージ形成を図ること、③滞在時間の延長を図ること、④日中の日常的利用を図ることを目的した。4目標を総合的に達成するために、高原という特殊な空間性について理解を深め、空間形成の主要素としてハンモックの機能を考察し、現場において検証を行うことを目指した。研究の性質上、建築・都市論、建築計画、建築設計のメンバーで構成した。

高原の景観特性については、高原という特殊な空間について論的考察をおこない、ハンモックの機能に着目する動機をえた。星空観望のイメージ形成については、ハンモックの機能と人間の定位性、そして芝生広場への展開性を中心に、論的考察をおこなった。滞在時間の延長についても、ハンモックの機能に論拠をえた。日中の日常的利用については、ハンモックの仮設性に着目し、運用可能性を実践レベルで確認した。高原の空間特性とハンモックの機能性との関係を吟味した論的検証は、空間利用計画へと応用され、その計画は実践をとおして修正を繰り返えし、現在、安定的な取組みへといたっている。

2年間の総括となる本報告では、こうした論と実践にふれながら、プロジェクトの成果として纏める。また、本研究の実践部分は、通称「星空ハンモック」という事業名をもっている。この「星空ハンモック」が、観光市場に参入した今後も、さらなる進化を繰り返しながら継続的な事業になるよう、実践的な視点からの課題も添える。

#### 2. 六呂師高原の空間的特徴

---

\* 原稿受付 2020年5月29日

<sup>\*1</sup> 工学部 建築土木工学科 <sup>\*3</sup> 環境情報学部 デザイン学科

<sup>\*2</sup> 工学部 建築土木工学科 <sup>\*4</sup> 工学部 建築土木工学科

E-mail: shimizu@fukui-ut.ac.jp

## 2.1 六呂師高原の現状

高原は高地にある台地であり、人の手が入っていない原始の風景をイメージする。事実、六呂師高原は、県立自然公園に指定された標高 400～700m の高地であり、街中の広場や公園のような人為的開発から遠ざけられた風景を保有している。

そもそも高原は、道があることによって認知され、空間として使用されることになる。空間として使用されるべくして天文台を有する自然保護センター、観光誘客施設「ミルク工房」、温泉施設、宿泊施設、大きなアスファルトの駐車場、かつてはスキー場の施設等々が立地することになった。高原という台地は空間であり、その空間性は地球の自然環境の一部として、そして高原の風景（客観としても心象としても）としてあるはずであった。しかしながら、使用という経済性をともなう人為的行為は、自然環境に対して、自然の生態を減少させるとともに、風景として、不調和という結果を導いてしまった。これが、現在の六呂師高原の姿である。

## 2.2 六呂師高原の空間性に関する考察

前節では、六呂師高原の現状を捉えたが、この現状は、六呂師高原の結果としての空間形成の状態となる。そのような空間において、我々は、星空を眺望する体験の場を提供しようとするわけであるが、そのような空間は、どのようにあるべきだろうか。空間に関する歴史的解釈を遡及しながら、人を中心に空間を論じたボルノウ (Otto Friedrich Bollnow, 1903–1991) の「体験されている空間」を拠所として、六呂師高原の空間性について考えてみたい。

ボルノウは空間を人間存在の成立を支える基本形式と捉え、「人間の具体的生活にたいして開き示されるままの空間」<sup>(1)</sup>と示した。これは、身体の向き・位置によって空間に意味的な優越がつけられる空間を指している。ボルノウが「現実的な具体的空間」<sup>(2)</sup>と称する空間である。

ボルノウの特徴が最も表れているのは、「空間はけっして人間に対して中立な、つねに同じものとして存続する媒体ではない」<sup>(3)</sup>という考え方である。これは、人の生活の仕方によって空間の立ち現れ方が異なるという意味であり、これをボルノウは「具体的空間」とよんでいる。この具体的空間は、いうなれば人間の空間へのかかわり方（体験されている空間）が、空間への問いの本質になることを示している。

この体験されている空間は、人間を中心として関連づけられる（アリストテレスの空間論的）空間であり、人間は空間に内在しているという状態にあるため、どのように空間内に存在しているのかが問われる。ボルノウは「いささか手あたり仕方では自分にとっては未知の媒体のなかへもちこまれている」<sup>(4)</sup>と理解しており、人間が空間の中に無造作に、もしくは偶然に投げ出される状態を空間が持っているとする。そして、この人間と空間の関係について、ボルノウは、「そこで、しかし人間はまず住まうことを学ばなければならない、というのは、投げ出されているという、おそらくは不可避の、しかしいずれにせよ災いに満ちた成長の過程でふみこんでしまった状態を、人間は、自分の努力で住まうという状態に変換させなくてはならないというふうにまさに理解されるのである」<sup>(5)</sup>と結論づける。

こうした、ボルノウの空間に対する理解を、六呂師高原の空間に照らすと、高地の広大な自然空間という一般的な見方から、それが、我々を中心とした「体験されている空間」として、人間と空間との相互関係の舞台であるという見方に変化する。人間は、六呂師高原という未知の空間に投げ出され、いずれは、その空間を自分のものとするだろうが、その過程で、高地の大草原には自然の猛威を回避する「家」がないため、自らの努力で安心できる庇護の空間をつくりだし、安定的に定位するのである<sup>(6)</sup>。

本研究では、ボルノウの、この「住まうこと」と「住まうという状態」を、バシュラール (Gaston Bachelard, 1884–1962) が論じる、世界という不安から身を守る家、すなわち「ゆりかご」という庇護のなかにいること、その状態を指すこととして、理解を深めていった<sup>(7)</sup>。

## 2.3 六呂師高原空間からハンモックへ

「ゆりかご」という庇護の空間を、どのように六呂師高原に方法として具体化できるのか、この問いに対して、筆者らは、ハンモックの機能に着目した。その機能を理解するために、機能の本質を問う「道具性」について理解を深めた。

ハンモックは「横たわる」ことの機能をもった道具である。ハンマーは「たたく」ことの、コップは「水をいれる」ことの道具性と同じである。また、ハンモックは「つつまれる」という効果を人間に与える。このことから、「横たわる」ことを目的として「つつまれる」という効果を派生させる道具的機能であるといえる。これは、ハンモックが「つつまれる」ことを内包した道具であることを意味している。筆者らは、この「つつまれる」という庇護につながる効果に着目した。人間は、「横たわる」行為の先に、あるいは、それ以前に、経験的に「つつまれる」行為を求めて、六呂師高原という広大であるがゆえに定位しがたい空間において、自らの居場所を定め、安心できる空間として了解する、この論理を導いた<sup>(8)</sup>。

また、「横たわる」は、人間の「視線を上方に固定する」という派生効果を生む。ハンモックは、「視線を上方に固定する」ことを内在させた道具的機能といえる。この上方への視線の固定化は、筆者らが求める星空観望にとって有効である。星空を眺める行為を求めている人間にとっては、経験的に「視線を上方に固定する」道具的機能をもつハンモックに定位される（ボルノウの「具体的空間」）ことになる。

結論として、ハンモックを六呂師高原に投じることで、人間は「横たわる」経験、「つつまれる」経験、「上方に視線を固定する」経験をする。人間は、この経験によって、六呂師高原という環境（世界）を了解し、利用できる自己の居場所として再構築する。これを経験的に了解している人間は、六呂師高原にハンモックがあることで、生活の様式が異なろうとも、それを自己の定位とすることが可能になる。このように、計画の前段となる考察の結果を導いた。

### 3. 「星空ハンモック」の会場計画とその経過

#### 3.1 会場計画

星空鑑賞にふさわしいイベント会場とするために計画した主な事項を以下に記す。

##### (1) ミルク工房奥越前の延長営業

星空鑑賞イベントのため 18 時～24 時迄の延長営業（通常は 17 時迄）。

##### (2) 牧場地の特別開放

周辺敷地との一体的かつ開放的なイベント展開のため、ミルク工房奥越前の敷地に隣接し普段は立入禁止としている、福井県が管理する牧場地を開放した。本イベントでは持参ハンモックの設置エリアとした（Fig. 1）。

##### (3) ハンモックによる星空観察

六呂師高原の自然や夜の闇を感じながら、ハンモックに身を委ね、つつまれる身体的体験と、日本一の星空を見ることに集中しての瞑想的とも言える精神的体験を相乗的に味わうことで、観光素材としてより魅力的なものになることを考えた。

##### (4) ハンモックの配置計画

会場計画としてミルク工房建物北側エントランス前の六呂師高原を臨むアプローチエリア、及び建物西側に隣接して広がる県の放牧地を利用した。アプローチエリアにミルク工房が購入したハンモック 20 基（木製部材による自立型、座面キャンバス生成色）を設置した。各ハンモックはミルク工房建物を背にし、六呂師高原の山々に向かい並ぶ配置とした。ハンモック設営に際し、星空鑑賞へ没入する適度な距離感の確保、かつ夜の闇の中で不安感を感じない配置を心がけた（Fig. 1）。

放牧地は、参加者が持参するハンモックを任意に設置可能なエリアとした。ミルク工房建物から離れてのハンモック設置が可能であり、星空鑑賞を妨げる光のない良好な環境で、360 度天空を臨むことが出来る。より観測的、専門的な星空撮影者の利用、またキャンプ用品等を持参するアウトドア愛好者の利用を意図した（Fig. 2）。

##### (5) 会場の照明計画及びコテトラの配置

各ハンモックへと至るメイン通路を設定し、キャンドルグラスを通路沿いに並べることで、キャンドルを辿り自然に、かつ安全にハンモックへと至ることが可能な照明配置とした。

キャンドルグラスのシェードとしての役割、並びにハンモックの形状や大きさや配置等を踏まえ、後述するコテトラ立体造形の形状や大きさの検討を行なった。30cm と 40 cm の 2 種類の長さにより構成された正二十面体や正四面体を基本とした大小様々なコテトラを会場に設置した（Fig. 3）。



ハンモックを使用する際に、ハンモック周辺に設置したキャンドルを踏みつけてしまう危険性を考え、正二十面体形状のコテトラをキャンドルの上に被せて、シェードとした。また仮にシェードを踏みつけてもストローとクリップで出来た軽い立体であるため、転倒などの危険性が少ないことも使用した一因である。キャンドルのほのかな光に照らされた、直径 40 センチほどのコテトラが目に入ることで、足元を照らすための必要十分な照度を提供すると共に、コテトラ近くにハンモックがあることを暗示させるサイン的役割を意図した（Fig. 4）。

また前庭や牧草地の周辺に点在する樹木や岩等の周辺環境にもコテトラを配置すると共に集中的にキャンドルでライトアップを行った。ハンモックを設置する建物近傍だけでなく、会場周辺の牧草地全体へと広がりのある演出を意図した。またライトアップを行った範囲までがイベント会場敷地であることや、暗い会場において安全範囲にあることを、来場者に暗示させることを意図した。

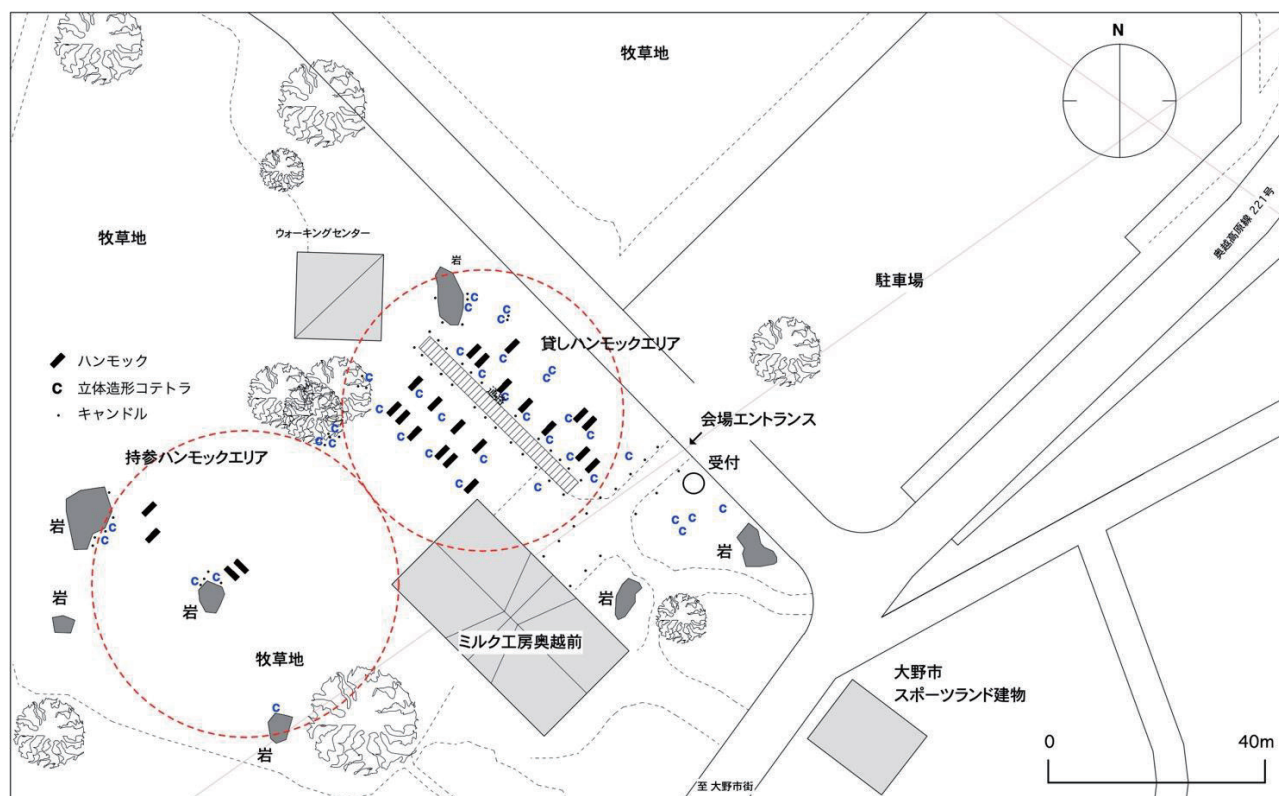


Fig. 1 会場配置図



Fig. 2 持参ハンモックエリア



Fig. 3 大小様々なコテトラ

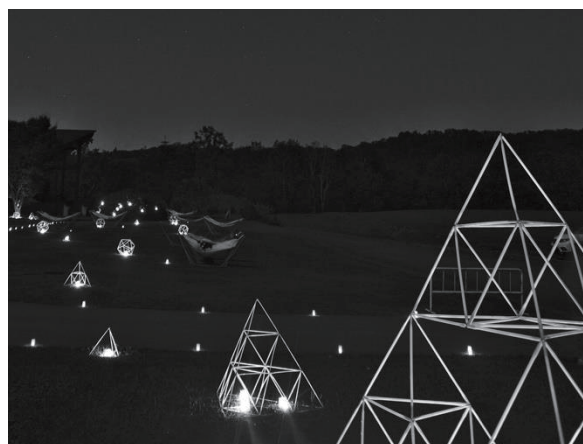


Fig. 4 シェードとしての役割

### 3.2 立体造形コテトラの導入

「星空ハンモック」イベント会場が星空鑑賞にふさわしい空間を形成すべく、コテトラ（Cotetra）と名付けた立体造形を導入した。市販のストローとゼムクリップを繋ぎ合わせて正四面体等の簡易な立体から、高さ 10m に

迫るピラミッド状の立体、直径 5m 高さ 2.5m のフラードームまで誰でも簡単にかつ複雑な造形までつくることが可能であり、様々なイベントでワークショップを行ってきた<sup>(9)(10)</sup>。「星空ハンモック」イベント会場にて星空鑑賞にふさわしい空間を形成するために、立体造形コテトラを用いる利点を以下に示す。

(1) 視認性及び安全性をもった照明シェードとしての役割

長さ 30 cm のストローとクリップを組み合わせ、正二十面体を基本とした立体造形を制作し、キャンドルグラスのシェードとして使用することとした。ストロー素材はキャンドルグラスのわずかな光でも反射しやすく、星空鑑賞に適した照度の中で立体造形の視認性を確保できる。またストロー材が軽く柔らかいため、照度の低い会場内で参加者が万が一立体造形に接触した際の安全性への配慮も可能である。

(2) 星空鑑賞イベントと親和性のある造形や演出の可能性

コテトラ立体は、正四面体、あるいは正二十面体等、全ての辺の長さが等しい正多面体による造形を基本としている。この造形的シンプルさが星空鑑賞イベントのシンプルさに相通ずると考えた。イベント当日は流星群が極大となる日であり、ストロー素材で出来た軽くて透明感のある「星のかげら」が、六呂師高原に転がって居る様をイメージし、星空鑑賞との親和性のある演出を試みた (Fig. 5)。

(3) コテトラ制作への学生参加

会場に設営した各コテトラは本学建築土木工学科清水研究室所属学生及び清水担当の実践工学演習基礎の受講学生と制作を行い六呂師高原の会場へ搬入した。立体造形コテトラの制作を通して学生が参加することが、より本学が参加する連携事業の意味合いを強くすると考えた。



Fig. 5 星空ハンモック会場より奥越高原牧場方面を臨む

### 3.3 2018 年 8 月プレイベントの試験開催

10 月のイベントに先立ち、ペルセウス座流星群が見頃となる 8 月の 11、12、13 日の三日間、ミルク工房建物前のみにて試験的なプレイベントを開催した。3 日間で述べ 600 人 (8/11 : 200 人, 8/12 : 200 人, 8/13 : 200 人)



の入場者の下、ミルク工房建物周辺へのハンモックの配置や、照明として採用するキャンドルの照度、立体造形コテトラによるディスプレイ等、星空鑑賞にふさわしい空間を形成するための演出を実証的に確認した。

また解決すべき幾つかの課題点も挙がった。以下主な課題点及び10月イベントに向けての対策を述べる。

#### （1）駐車場への車の誘導

ミルク工房建物近くに位置する駐車場に出入りする車両のヘッドライトが、星空鑑賞の妨げになった。10月イベントでは別の場所に駐車場を確保、誘導した。

#### （2）キャンドルの防風対策

蝋燭によるキャンドルグラスが風に対して弱く、再点火のために広い会場を回ることが容易でなかった。いくつかの小さな蝋燭の炎のゆらめく様子は、幻想的でありまた星空鑑賞をアシストする照明としても効果的ではあったが、10月イベントでは蝋燭に加えあらたにLED式のグラス用キャンドルを追加した。

#### （3）コテトラの大きさや数量

プレイイベントにて20個のコテトラを設置して照度や会場の演出において効果的であることを確認した。10月イベントではミルク工房建物に隣接する牧草地も開催エリアに含まれより広いエリアでの演出が必要なことから、大きさや形状の異なるコテトラをあらたに20個制作した（Fig. 6）。

#### （4）レストランの照明演出

レストランから会場を臨む窓には、屋外へ光が漏れないようにロールスクリーンを降ろして営業を行なった。ハンモックを設置した屋外会場との一体感が薄れると同時に、レストランが営業中であることが認知されにくい結果となった。10月イベントではレストランの照明を消し、キャンドルグラスを用いた照明演出とした。屋外の会場との一体的な空間形成を行いつつ、屋外の寒さから一息つける休憩所的な役割を持たせた（Fig. 7）。

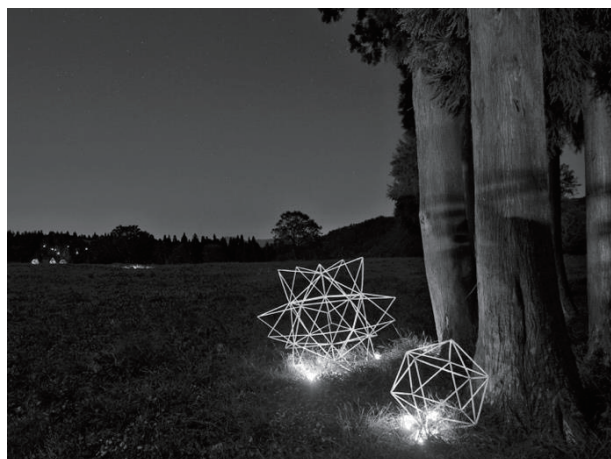


Fig. 6 牧草地エリアに広がる照明演出



Fig. 7 レストラン内部の照明演出

### 3.4 2018年10月イベントの活動及び今後の課題点

オリオン座流星群が極大となる10月20, 21日にイベントを開催した。2日間で述べ150人（10/20：100人、10/21：50人）の入場者があったが、イベント初日である20日の開催時刻18時の気温は12度程度、その後気温は下降し終了時刻の0時には8度となり、寒さを感じるイベントとなった。二日間に渡るイベントから今後の課題点について、以下に記述する。

#### （1）ハンモックの配置

来場者はカップルや家族連れがほとんどであり、配置したハンモックを移動して来場者毎に寄せ合うことが多かった。個人にもグループにも対応した配置について今後の検討点と考える。また専用エリアを設けたハンモック持参の参加者が少なかった。イベント告知におけるアナウンスのあり方についても、検討が必要と考える。

#### （2）会場周辺空間の活用

ミルク工房建物周辺の前庭や牧草地に点在する樹木や岩を使つてのコテトラやライトアップによる演出を行ったが、周辺緑地や牧場、六呂師高原牧場へと至る道路を含みこむより広い範囲に渡る空間活用の可能性を感じた。ハンモックの配置はもちろん、ライトアップやコテトラ配置など今後の課題としたい。

### (3) 月齢を考慮しての開催日の検討

イベント当日が満月に近く星空鑑賞の観点では時間帯により、星空よりも月明かりが勝ってしまう面があった。月齢を考慮しての開催日の検討が必要である。星空観光素材の開発が本ブランディングの重要なテーマであるが、星空鑑賞に適したダークナイトを確保しているということは、月も美しく輝くことでもある。ダークナイトという視点から星空も月夜も包含しての観光客誘致イベントの検討が必要と考える。

### (4) 寒さを星空イベントの味方につけるホスピタリティ

寒さ対策として会場受付にて使い捨てカイロの配布が行われ、レストラン内でも温かいクラムチャウダーやコーヒーの提供を行った。野外での星空鑑賞にとり気温が低いことをネガティブ要素と捉えなくてよいと考える。ハンモックの上で楽しめるような飲食メニューの開発、毛布の貸与、イベント告知の際の寒さ対策を訴え、かつ行ってみたいと訴求する効果的なアナウンスの方法等、寒さの中での星空鑑賞に楽しみを覚えるホスピタリティやアシストのあり方について、さらなる検討が必要と考える。

## 3.5 2019 年度の取り組み

2019 年度には、8 回のイベントが開催され、述べ 1424 人の入場者があった (Table. 1)。2019 年度は雨天や曇天の日が多く、必ずしも満点の星空とは言えない時間帯もあったにも関わらず、多くの入場者があった。自然の中でハンモックに体を預ける体験の面白さが実証されたとも言える。

Table. 1 2019 年度のイベント開催日と入場者数

日	5/5(土)	7/27(土)	8/3(土)	8/10(土)	8/11(日)	8/12(月)	8/13(火)	8/17(土)	8/24(土)	9/27(土)	
天気	曇り	雨のため中止	曇り	曇り	曇り	曇り	雨のため中止	晴れ	曇り	曇り	
ハンモック利用者時間別人数	19:30~20:30	42	0	44	58	55	51	0	53	53	18
	20:30~21:30	26	0	59	60	61	54	0	52	42	12
	21:30~22:30	39	0	49	57	37	51	0	49	44	12
ハンモック利用者数	107	0	152	175	153	156	0	154	139	42	述べ人数 1078 名
入場のみ	0	0	18	43	47	89	0	133	16	0	述べ人数 346 名
入場者数	107	0	170	218	200	245	0	287	155	42	述べ人数 1424 名

## 4. 空間構成の課題

2019 年度に開催を重ねる中で、さらなる空間構成やイベント演出における以下の課題が挙げられる。

### 4. 1 屋外ハンモック会場について

- (1) ハンモックで星空を鑑賞している際に、周囲の照度を調整する必要があると思われる。また、星空観賞の際に可能な限り光が入ってこない工夫が求められる。例えば上部に光を発しないような灯り・照明を選択するか、そのように加工すれば、ハンモックに寝そべっている際の視野に入りにくいと考える。
- (2) 受付の場所が分かりにくいので、車でアクセスした際に、星空観賞の邪魔にならない程度に目立つような位置に配置するか、看板・灯りなどで工夫する必要がある。
- (3) 当初配置された調整前の演出が単調に感じられたため、メリハリをつけた光の演出が必要と思われる。星空の鑑賞が第一目的なので、灯りが飾りではなく、視界の邪魔になってしまうことを避けるべきである。その意味では、灯りを最低限度に配置することも一案かと思われる。
- (4) 近隣の温泉施設の明るさが気になったため、協力が得られるのであれば、照度を落とすなどの配慮が必要と思われる。
- (5) 場所の広さにも関係するが、ハンモックの位置や並び方にコンセプトが必要と思われる。隣のハンモックとの距離をなるべく大きくとるか、均一に並ばないようにする。話し声の問題も懸念されるが、家族や友人同士であればすぐ隣に設置するなどの方法が考えられる。

### 4. 2 ミルク工房施設について

1. はじめに で述べた 4 目標の観点からみた現在のミルク工房施設 (Fig. 8) の主な課題は、(1) 外部とのつながりが希薄、(2) レストラン家具のミスマッチの 2 点と考える。

(1)についてはレストラン客席から経ヶ岳へと視線をむけると、その手前に大規模な駐車場のアスファルト面が見えてしまい、①高原の景観特性を活かすこと、が十分実行できていない状況がある。また経ヶ岳側に設置された外部テラスは周辺地盤と2mのレベル差があるため周辺環境との一体感が十分演出できない。これらの解決策として、現在駐車場として利用されているエリアの公園化と盛り土によるテラスと地盤面の接続を提案する。

(2)については、白いクロスのかかったテーブルとシルバーを基調とした金属脚の椅子が均一に並ぶ様子と、集成材の架構がつくるダイナミックな空間との不調和があげられる。③滞在時間の延長を図る、④日中の日常的利用を図る、の目標からすれば木や鉄など素材感のある家具を基本に、テラス側にはソファなど食事とは異なる利用形態を促す家具の採用を提案する。



Fig. 8 ミルク工房配置・平面

## 5. まとめ

星空ハンモックイベントは2018年からの2年間にて上記に記したように星空鑑賞イベントを構想し、会場計画を練り、開催を重ねつ本報告まで到達した次第である。2020年度も複数回の開催を予定されている。イベントがより魅力的な観光素材となるべく、今後の課題および課題解決に向けた提案を以下にまとめる。

- (1) ハンモックの多様な配置。来場者の人数やグループ構成に対応したハンモックの並べ方等の検討。
- (2) 星空鑑賞に適した照度を確保しつつ、星空ハンモックの雰囲気にもふさわしい光演出の工夫。
- (3) 会場周辺施設を含めての空間構成。周辺の照明や会場へのアプローチ等のコントロール。
- (4) ミルク工房施設のさらなる活用。テラスによる外部空間との接続、レストランインテリア等の検討提案。
- (5) 寒さ対策等、屋外イベントの特徴を活かしたホスピタリティあふれるコンテンツの開発と提案。

上記に挙げた課題に対する、さらなる検討や提案を行なっていく次第である。

## 謝 辞

本事業は文部科学省私立大学研究ブランディング事業として実施している。本事業の実施にあたり大野市職員の遍照誓応様ならびにミルク工房奥越前の中村圭吾オーナーには多大なる尽力を賜った。また本学社会連携推進課江藤浩一前課長には職務を超えた数々の応援を賜った。皆様に感謝の意を表する。

## 文 献

- (1) オットー・F・ボルノウ『人間と空間』、大塚恵一訳、せりか書房、1978年、P.17.
- (2) Ibid., P.18.
- (3) Ibid., P.19.
- (4) Ibid., P.260.
- (5) Ibid., P.261.Iasobid.



- (6) ここでいう「安定的に」は日常性を意味する。周知のとおり六呂師高原は生活圏から遠く離れた場所に位置しており、一般的には日常から離れた空間として認知されている。六呂師高原の日常化への追求は、取組みの方向性として避けて通れぬ課題ともいえ、日常性への理解は、六呂師高原の空間形成の在り方に影響を及ぼすものと考えられる。
- (7) バシュラールの「住まうこと」についての思索は詩人のイメージに依る。詩人がつづる「家」と「自然の厳しさ」との関係についてのバシュラールの解釈は、ハイデガーの「世界－内－存在」における「被投性」、そしてボルノウが示す世界に「投げ出されている」に通じる。それは厳しい経験によって本来の「住まうこと」へと導かれる人の本性を示している。バシュラールは「家はいつも大きな揺籃なのである」（ガストン・バシュラール『空間の詩学』、岩村行雄訳、ちくま学芸文庫、2002年、p.49）と比喻し、外界や悪意のある人（つまりその全体である世界）から守ってくれる家（物質的な家、心理的な家としての存在）として「ゆりかご」と表現する。
- (8) ハンモックという道具の性質については、ハイデガー（Martin Heidegger, 1889-1976）の適所性の理解による。ハイデガーによれば、ハンマーは釘を打つ道具として適所性が得られるが、それは釘を打って家を固定することができるからであり、その行為は家の固定によって暴風雨から家を守るという目的があるからであり、その目的は人が住むという目的に適っているからである。つまり、ハンマーの適所性は人が住むという目的を以前より含有しているという論理である。ハイデガーの適所性については、ハイデガー『存在と時間』所収「第十八節 適所性と有意義性 世界の世界性」、原佑編「ハイデガー」世界の名著 74、中央公論社、1993年（8版）、pp.178-186より理解を得た。
- (9) 六本木アートナイト 2015 でのワークショップ、<http://www.roppongiartnight.com/2015/programs/431/ibid.>, P.18.
- (10) 森美術館でのワークショップ、2016, [https://www.mori.art.museum/contents/foster\\_partners/event.html#entry\\_5277](https://www.mori.art.museum/contents/foster_partners/event.html#entry_5277)

（2020年9月10日受理）